JSURP News ‘230801

発行：Jsurp 日本都市計画家協会
https://www.jsurp.jp/
編集責任者：渡会清治

今週の主な News

1. JSURP 越喜来復興支援にひと区切り
2. JSURP 越喜来支援のあらまし
3. 甫嶺の復興まちづくり支援
4. JSURP 越喜来支援活動と私

■JSURP 越喜来復興支援にひと区切り/渡会専務理事

JSURP の現地復興支援の中で最も時間をかけて関わってきた大船渡市越喜来地区での支援活動がこの 7 月で一応終了となりました。2013 年の春にはじめて越喜来を訪問し鈴木さん、片山さんとお会いして支援の打診を受けてからちょうど 10 年が経過しました。7 月 8 日に越喜来で復興まちづくり委員会の解散式が行われ、JSURP の4理事（渡会、内山、平井、安藤）が招かれて参加し、JSURP への感謝状を頂きました。

また途中、JSURP が支援活動を展開してきた大船渡市中赤崎地区に立ち寄りました。新たに計画された復興道路や高台住宅団地、小中学校、サッカーグラウンドなどは復興事業によって整備されましたが、低地活用は未だ途上でした。

■JSURP 越喜来支援のあらまし/内山　征理事

JSURP は 2013 年 7 月から 10 年間大船渡市越喜来の復興まちづくりを支援してきました。この度、新組織（越喜来地区活性化協議会）の発足に伴い、JSURP の支援も完了しました。

★越喜来の復興まちづくり支援のスタート

越喜来地区では、被災直後から独自に復興委員会をつくり、市への提言など、自主的な復興活動を進めていました。発災から2年が経過する頃、JSURP へ支援依頼がありました。

人口減少が被災によりさらに加速し、コミュニティの維持が難しくなっているので、長期的視野をもって持続可能な地域づくりを支援してほしいとのことでした。

★支援内容

支援には3つのミッションがありました。

①復興まちづくりのプランづくり
②まちづくりの実践の始動
③地域運営組織の構築

越喜来は浦浜泊地区、甫嶺地区の2地区に分けられます。浦浜泊地区、甫嶺地区ともに、月１回ペースでのまちづくり委員会を継続しました。浸水した低地（居住が制限されるエリア）を、地域主体で整備、管理するための土地利用プランと実現方策の意見交換を続け、その途中でまちづくりの実践を繰り返し、身の丈に合った計画をつくる「実践型プランニング」の手法で進めました。

浦浜泊地区ではど根性ポプラ広場の整備・管理、甫嶺地区では蕎麦の栽培、金山跡地の観光ツアー、イワナの放流等の実践に繋がりました。これらの活動は、浦浜泊地区ではイチゴ、トマトの農園の誘致、甫嶺地区ではBMXコース等の低地の活用や企業誘致につながっています。

また、こうした活動を進めた結果、浦浜泊地区、甫嶺地区のそれぞれで地域運営組織をつくることができました。

★復興から日常のまちづくりのスタート

まちづくり委員会の活動を引き継ぎ、2022 年末に越喜来全体を統合するかたちで、越喜来地区活性化協議会が発足しました。若手の住民も加わり、日常のまちづくりのための新地域運営組織がスタートすることになったのです。

★まちづくり委員会の解散式

2023 年 7 月に、これまでの2つのまちづくり委員会の解散式があり、JSURP のメンバーも参加しました。新組織への移行ということもあり、前向きな解散式であり、JSURPも感謝状をいただきました。

s

JSURP は地域主体のまちづくりを推進する事業を全国で展開していますが、越喜来支援はその原型ともなるもので、その後の全国での活動展開の大きな実績となりました。

私にとっては、10 年というロングスパンでの継続的な活動は、40 歳代から 50 歳代への移行期間の貴重な経験であり、コミュニティデザインの専門性を活かすことができ、かつ新しい視点で大変勉強になりました。今後、若手のプランナーへこの経験を伝えていきたいと思っています。また越喜来地区の方々とは今後もプライベートでのお付き合いを続けていく所存です。これが越喜来復興まちづくり 10 年間の成果です

■甫嶺の復興まちづくり支援/平井一歩理事

★甫嶺地区まちづくり委員会の取り組み

甫嶺は越喜来地区で最も小さな集落で、震災前の人口は約 470 人。津波被害は三陸鉄道の盛土によって線路から海側の 3ha に抑えられたが、人口減少をはじめ震災前からの課題も抱える地域であり、被災地だけでなく、甫嶺全体の将来像や取り組みの検討が必要であった。

JSURP は 2013 年冬から伴走支援を開始、基礎的な情報の整理や地域の資源掘り起こしを行い、まちづくりの“思い”「みんなが帰って来られるふるさとを残す」と土地利用イメージを 2014 年にとりまとめた。

また、今出山金山ツアー・蕎麦まつり、甫嶺の駅の傍の蕎麦、ほれい花公園など多岐にわたるアクションを地元と共に考え実践してきた。甫嶺のまちづくりは、空間というよりも、アクションを繋げていく時間のプランニングが大きな役割を果たした。

2020 年、この様なアクションを定着・発展させていく受皿として、甫嶺復興交流センターが整備された。ハード整備は市が尽力、並行して住民による地域会社を設立して運営を担っている。また、校庭は民間企業により BMX スタジアムに整備され、一体的に運用している。

★復興のふりかえりと新たなまちづくりへ向けて

まちづくりの本格化と同時にコロナ禍に突入したことは、交流の面で大きなダメージであった。また、委員会のオンライン化が進まず JSURP の関与も難しくなり、地域内だけの議論に陥りがちになってしまったことも反省点である。

一方、東北唯一の BMX はコロナ禍でも一定のファンを集めたようだ。委員会自体も 2023 年度に発展的解散し、住民の活動や若い世代の巻き込み、市全体の連携なども視野に入れた越喜来地区活性化協議会として再出発を行った。JSURP の活動は一定の区切りだが「ふるさと」実現のために今後も関わっていきたい。

「甫嶺の駅の傍の蕎麦」整備の様子

■JSURP 越喜来支援活動と私/安藤裕之理事

★JSURP と市のコラボの「きかっけ」

私が大船渡市の復興に関わるようになったのは 2014 年４月からの１年間、相模原市から大船渡市に派遣されたことによるものです。同じ時期に JSURP は越喜来復興支援を開始し、私は大船渡市側の職員として JSURP の方々と同じテーマを追求することになりました。

この当時の大船渡市復興行政の大きな課題は、①災害危険区域の早期指定、②円滑な集団移転の実施、③中心市街地の区画整理・拠点整備、④都市計画区域外の集団移転跡地の活用でした。私は④の移転跡地利用の検討を命ぜられましたが、当時は全く白紙の状態でした。

一方、JSURP チームは被災住民とともに地区の復興計画づくりや住民主体の実行体制づくりを進めており、地域主体の復興の歩みをサポートしていました。

私、そして大船渡市にとって非常に幸運だったことは、JSURP のワーキングチームに相模原市の仕事を通じて知り合っていたメンバーが含まれていたことです。このおかげで、私は越喜来浦浜・泊地区の協議会に円滑に（半ば強引に）参加することができたのでした。

まさかこのタイミングで大船渡に行く事になるとは思ってもいないことでしたが、地域主体で進めることは聞いていましたので、大船渡市の内部でもそれに沿ったプラン作りを提案することができました。本当に恵まれた出会いでした。

★JSURP の果たした役割

こうして市職員が協議会に参加したことで、地元の方々は市役所に対して大きな期待を抱いたようでした。しかし、JSURP ワーキングチームの復興支援の趣旨・思いを私たちもしっかり共有しており、「あっちもこっちも困っているのでできないことがたくさんある。しかし、地域が頑張っていると市としても支援しやすくなる。」と何度も繰り返したのでした。これが通用したのも JSURP メンバーがそこまでの半年間の活動で、地域主体の考えを浸透させてくれていたことが大きく影響していると感じました。

大船渡市プロパーの職員も協議会に何度か参加することで、越喜来地区以外でも地域主体のまちづくりを進めようと動いてくれたのです。JSURP の支援活動が行われていなければ、大船渡市が地域に入り込んで地域主体のまちづくりに関わることはなかったことでしょう。

★JSURP 活動の個人的評価

こうして１年はあっという間に過ぎたのですが、離任後も JSURP とのコラボが続いて欲しいと思い、市長はじめ幹部の皆様の理解を得て、越喜来と中赤崎の JSURP による継続的な支援活動が実現することとなったのです。

あれから８年がたった今回の訪問で、越喜来の皆さんとの痛いくらいの力での握手で、この 10 年の JSURP 復興支援活動は大成功！であったと私は確信しました。

その後私は JSURP の会員となり、現在は理事として、越喜来支援の際に一緒に活動した会員の方々等と全国各地で地域主体のまちづくり活動に係っています。

■協会会費の早期納入のお願い

会員の皆様には 2023 年度の協会会費を速やかに納付いただくようお願いいたします。